

夕暮れのバス ● 齋賀万智

教室を施錠しましたと言う君の一パーセントを疑っている

この子らは良い子ばかりと言い聞かし先送りする目を合わすこと

わかっているだろう、わかってくれるだろう、「だろう」が重なり授業は進む

教室にプロジェクターの完備され黒板消しの行く先を思う

「自分だ」と細くつぶやく女生徒はヤングケアラーの記事を読みおり

ナイロンのスクールバッグに落とされた雨粒は意思を持ちながら散る

曇り空と手をつなぎたい帰り道 見えない方が良いこともある

はつなつの教室に注ぐ陽光はクラスみんなを主役にさせる

少しでも冒険をする 個性とは塗り絵の枠をはみ出す部分

白と黒でしか表現できぬ朝 順番通りの今日を生きゆく

感情の吹き出し口が故障して上手く笑えずさびつく空気

嘘のない青空の下で嘘つく子 満腹だからごはんいららない

見たいものしか見ていない新任の我の心に突き刺さるナイフ

ほかよりもゆっくり時の流れいる窓際の席で失敗を食む

席を立ち置き去りにした体温を淋しく思う 夕暮れのバス